

「エコ活動」 身近に取り組んでいる

作文コンクール

第23回小・中学生

ポスターコンクール

第17回小・中学生

NPO法人地球こどもクラブ
2013年
入賞作品集



“ぼくたちの地球を守ろう”
テーマ：身近に取り組んでいるエコ活動

【第23回小学生・中学生 作文コンクール】
入賞者8名

◆内閣総理大臣賞

日本 ^{サカモト}坂本 ^{マユイ}真彩／埼玉県 川越市立城南中学校 3年生
『命をつなぐ』

◆外務大臣賞

小学生部門 日本 ^{ミヤザカ}宮坂 ^{ハナエ}華恵／埼玉県 吉川市立吉川小学校5年生
『地球のためにできること』

中学生部門 日本 ^{カネダ}金田 ^{リサ}梨沙／神奈川県 洗足学園中学高等学校1年生
『日本の知恵とエコ活動』

◆文部科学大臣賞

小学生部門 日本 ^{マルヤマ}丸山 ^{リョウタロウ}遼太郎／岐阜県 高山市立江名子小学校6年生
『日本のでっぺんにあるぼくの家』

中学生部門 日本 ^{シバサキ}芝崎 ^{ハルナ}遥奈／群馬県 伊勢崎市立第四中学校2年生
『エコに通じる「日本の心」』

◆環境大臣賞

小学生部門 日本 ^{モリヤマ}森山 ^{ナオキ}直之／千葉県 浦安市立東小学校5年生
『クリーン活動で思うこと』

中学生部門 日本 ^{オグイラ}小平 ^{シユウリ}守莉／山梨県 山梨大学附属中学校1年生
『地球に優しくなるために』

◆地球こどもクラブ賞

日本 ^{スズキ}鈴木 ^{ミノリ}美紀／宮城県 仙台二華中学校3年生
『生活排水の工夫』

内閣総理大臣賞

タイトル：【命をつなぐ】

埼玉県 川越市立城南中学校 3年生 坂本 真彩

「エコ」私たちの世代では、物心がついた頃からずっと耳にしているありふれた言葉である。メディアでもよくとりあげられているし、家庭や学校でもその必要性や行動のあり方についてどれほど教わってきたかしのれない。日常生活の中で、エコ活動といえば、おそらく、リサイクルなどゴミの問題とからめた環境保全や節電、節水などの水、エネルギー資源の消費削減、二酸化炭素の排出抑制などをイメージすることが多いと思われるが、それらは、もちろんのこと、同じく生きるということを天から授かった小さな存在の側面からも考える必要があるように思う。

以前、遊びに出かけた時、中流の浅瀬で懸命にもがいているサワガニを見つけた。捨てられたであろう古い空き缶の溝に1本の足をとられて動くに動けない状態だった。すでにその足だけは、だらんと力なくただ、軀幹にぶらさがっているような感じで、しばらく、どうにか取れないものかと試みてみたが複雑に絡みこんでいて困難を極めた。

やがて、母は決心したかのように

「これは、もう、だめね。」

と言ったかと思うと、瞬時に足を引っ張り抜いた。

ショックだった。止める間もなかった。

「何するの。」

怒りをあらわにする私に、母は冷静に

「こうしないとずっと動けなくてただ、死んでしまうしかないのよ」

と言った。もう、無性に腹が立つのを乗り越えて、悲しみというか、情けなさというか、人間の心無い行動で1本の足を失わざるを得なかったことに、なぜかとても申し訳ない気持ちになって涙があふれた。

持ち帰って保護しようか迷う間もなく、大きな代償のもとに自由を取り戻したカニは、少々不格好な歩き方だったけれど、足早に岩陰に消えていってしまった。このことで、私は、人間の身勝手さというものの罪を深く胸に焼付けられ、再度、日々の行動について反省するきっかけとなった。

確固たる文明を開き、いつしか、自分たちは、地球上の生物の頂点であるとあぐらをかき驕ってはいないだろうか。あらゆる意味で弱いものたちを見下し、ないがしろにしてはいないだろうか。

どんなに小さな命でも、できる限りその尊厳が守られるように、自然を大切にすることが、私のエコ行動の原点だ。それは、決して特別なことでなく、当たり前のことを当たり前に行うという良心にもとづくものである。

見渡せば、本当にたくさんの生物たちで満ち溢れている地球。その中で、生かしてもらっていることに日々感謝の気持ちを重ねながら行動の意味を考えて生きたい。そこで芽生えた数えきれないほどの命をつないでいくことができるように。

外務大臣賞：小学生部門

タイトル：【地球のためにできること】

埼玉県 吉川市立吉川小学校5年生 管坂 華恵

私は、ふだんの生活の中で自分ができる節約やエコ活動はすすんでやるようにしています。特に心がけていることが4つあります。

一つ目は、買い物に行く時はマイバックを持っていくようにしていることです。そうすることで、レジぶくろをもらわずにすむからです。

二つ目は、ゴミを捨てる時はきちんと分別して出すことです。再利用できる物はしげんゴミとして捨てるなど、リサイクルのことを考えてやっています。

三つ目は、お母さんと一緒にアサガオとゴーヤの種と苗を植えることです。去年に引き続き、今年も五月に植えました。みどりのカーテンを作ることで暑い夏を気持ち良くすごせるからです。ゴーヤは少しずつ上に伸びてきています。これからはどんどんネットにまきついて伸びてくるのが楽しみです。また、アサガオはやっと芽が出てきました。日に日に成長していくのがうれしいです。早くきれいな花をさかせたり、実をつけたりするといいなあと待ち遠しく思っています。それから、水やりは私のお手伝いの一つなのですが、その水やりにも工夫をしています。それは、水やりにお米のとぎ汁を利用していることです。そうすることで、お米をといだ水をただ流してしまうのではなく、ムダなく使うことができます。

四つ目は、学校で使用したプリントやお手紙のうら側がまだ使える時は、計算する紙として使ったり、メモとして使っていることです。そうすればわざわざ新しい紙を買わずにすむからです。まだ使える紙を捨ててしまうのはもったいないので最後まで使うようにしています。

もったいないと思う心があると、いろいろな場面で物を大切にしていこうと思えるようになります。食べ物をのこさずに食べる。水の出しっぱなしはしない。使っていない場所の電気は消す。などだれでも気をつければできることがたくさんあると思います。世の中には、便利なものがふえたけれど、すぐゴミとして捨てられてしまうものもふえていると思います。ひとつのものが生まれるのには、たくさんの人の手やエネルギーがついやされていると思うので、そうしてできあがったものを大切に思って使う心を持つことが大事だし、その心がエコロジーの出発点だと思います。

私は、これからも地球のかんきょうを考え、身近なところからエコ活動に取り組んでいこうと思います。そして、自分が大人になり、また自分たちの子供の時代になっても、きれいな地球をのこしていけるように、周りの人たちにもその心を広めていきたいと思います。

外務大臣賞：中学生部門

タイトル：【日本の知恵とエコ活動】

神奈川県 洗足学園中学高等学校 1年生 金田 梨沙

私は、小学校二年生まで、アメリカに住んでいました。アメリカの学校では昼食は、バイキング方式でした。生徒達は、食べ物を好きなだけ取り、食べ残しはプラスチック製の食器と共に全て一つのゴミ箱に捨てられていました。当時の私は、学校での昼食とは、そういう物だと思っていたのです。そして日本に帰国した私は、学校の給食に大変驚きました。食器は全て洗って繰り返し利用していました。また無駄な食べ残しが出ないように、生徒同士が配膳し、料理も配分していたのです。牛乳パックも決められた畳み方で、最小限のスペースでリサイクル工場に送られていました。私は、両親からこのような給食は、父母の時代からあったと聞き、日本のエコ活動に対する長年の知恵の積み重ねに感心しました。アメリカ時代には、なんとも思わなかったゴミを捨てるという行為が、とてもいけない事に思え、また「もったいない」と日本の伝統的な考えについて身を似て知ることになりました。

私はこの四月から中学生になり、昼食も学校給食からお弁当に変わりました。学校ではカフェテリアでパンやお弁当を買うこともできますが、私はゴミを出さないエコ活動として自分でお弁当を作ることにしました。調べてみると日本では、色々なお弁当グッズがありました。エコバッグに丁度良い形状のお弁当箱や箸はもちろん、繰り返し使えるシリコン製のおかずカップなども見つける事ができました。また、飲み物はマイボトルを持参し、市販のペットボトル飲料ではなく、自宅で作ったお茶を持ち歩くようになりました。

私はこのようにして、毎日のお弁当を通じて自分で出来るエコ活動に取り組んでいます。意外とスムーズにスタート出来たのは、これらのお弁当グッズが色、デザインなどが豊富で、使っていて気分が良くなる物を選ぶ事が出来たからです。アメリカのジップロックなどのようなつまらない見た目では使っていても楽しくありません。日本の伝統的な文化である「もったいない」と最近の文化である「カワイイ」の融合が私のエコ活動を支えています。

私はお弁当を通じたエコ活動についてアメリカの友達に話したところ、とても驚かれました。友人にとって、お弁当を作る事は難しくても、好きな飲み物をいつも冷たく飲むことが出来るマイボトルの利用であれば、いつでもスタート出来ると言っていました。この様に、日本では一般的なエコ活動もまだまだ世界にあまり知られていません。この日本独自であるエコ活動の知恵と文化を海外にもっと伝えるべきだと思います。そして、その使命は私たち若い世代にあるのだと思います。そんな事を考えながら、今日も私は、お弁当を作るのです。

文部大臣賞：小学生部門

タイトル：【日本のてっぺんにあるぼくの家】

岐阜県 高山市立江名子小学校6年生 丸山 遼太郎

父はよく「日本のてっぺんに住んでいるから、環境を大事にしなければいけない。」だとか「土に帰すことが大事。」と言います。

川は、県を越えて富山湾まで流れて行きますが、家の近くの山の向こうは太平洋側なので、川は愛知県へ流れて行きます。父が言うように、本州のてっぺんです。まえに最も下流の富山の海へ海水浴に行ったとき、海水に混じった細かいゴミを見て、入りたくなかったことがあります、環境について考えました。

ぼくの家では、いつも父が「衣食住」でエコの考えを大事にするように言っています。

「衣」では「安物を買うな。」が口ぐせです。「品質が良いあきない服を買う。」というのが、父の考えです。虫に食われてもウールが好きです。コットンも好きです。父は五十年以上も前の祖父の服を着ることがあるし、古着で買ったイギリス製コートもお気に入りです。

次に「食」です。ぼくの家では「食べ残しゼロ」と「生ごみゼロ」を守っています。買い物に行ったとき母は、食べる人の人数を考えて、たくさん買いません。生ごみは出ることには出るので、父が工夫して全部たい肥に変え、畑へ帰します。生ゴミばかりでなく、割りばしなどもゴミの日に出しません。分別して砕き、コンポストに入れば、そのうち菌やミミズが細かい土にしてくれます。

次は「住」です。最初に建てた時から百年以上が経った家に、ぼくたちは住んでいます。父が「ここはチョウナでけずったあとだよ。」と言って教えてくれた個所があります。板が江戸時代の道具でけずってあり、表面がでこぼこなのです。改築したときに、大工さんにわざわざ残してもらったそうです。

ぼくが「なんで建てかえないで、古い家にこだわるの？」と聞いたら、父は「うちのよような古い建物を簡単にこわすと、周りの人たちの心の中の景色を変えてしまう。」とか「新しい家はだれも住まなくなったとき、どうしようもない大きなゴミの山になる。昔からの木の建物は、材料のひとつひとつが土に帰る。だから、究極のエコの家に住んでいるんだよ。」と説明してくれました。ぼくは前まで、新しいピカピカの家に住んでいる友だちがうらやましかったけれど、古い家に住んでいることを今は誇りに思っています。

ぼくが住むてっぺんのまちにも、このごろ、大きな製薬工場が出来たり、家具メーカーが移転したりして、まちが大きく変わって来ました。すると、庭や畑には、山にいたキツネなどいろいろな動物が来るようになりました。ヒナを連れたキジが餌を探している姿を見ることもあります。動物たちにとっても、エコの家は居心地が良いのかもしれません。

下流ほど人口は増え、環境が悪くなりやすいはずですが。だから「てっぺんに住むぼくたちから、進んでエコの生活をするぞ！」と、家族みんなで考えながら暮らしています。

文部大臣賞：中学生部門

タイトル：【エコに通じる「日本の心」】

群馬県 伊勢崎市立第四中学校2年生 芝崎 遥奈

「身近にあるエコ活動って何だろう？」

そう考えた時に、真っ先に浮かんだのは、私の家の仕事でした。

私の家では、草木などの自然の素材を使い着物を作っています。その作り方は昔ながらの製法で、染めから織りまで全て手作業です。機械を使わないので電気もいりません。そして、主な仕事の場所は屋外です。冬は赤城おろしが吹く中、ストーブを焚き、ニュースで放送されるほどの猛暑でも、扇風機だけで暑さをしのぐ。だから季節の移り変わりや、自然の厳しさを感じながらの作業になります。

見ているだけでも大変そうな仕事場に、思わず「エコだねえ。」と言うと、父は「そんなんじゃないよ。」と笑います。

でも、節電や計画停電があった時には、仕事場にあったストーブや扇風機が、我が家では大活躍でした。そして、それを使いながら気がつきました。「昔の道具って、とってもエコなんだ！」と。

例えば、ストーブなら暖まるだけでなく、同時に、やかんでお湯を沸かして、部屋の加湿をする事もできます。昔、祖母は、そこでお餅を焼いたり、煮物を作っていたそうです。

あと、機織りの機や糸車などの道具なども古い物なので、使っているうちに壊れてしまうこともあります。合う部品さえあれば、家でも何とか直せる物もあります。修理をしている父を見て、私が「すごいねえ。」と驚いていると、「これが全部機械だったら、なかなか直せないんだよ。」と父は言いました。

これらはスイッチ一つで動かせる「便利」な物ではありませんが、使い回しや修理ができる「便利」な物です。

修理が出来る道具は、とても長く使えます。私は、家の仕事を見ながら、日本人は昔から物を大切にしているのだなと感じました。

人間が、今よりも楽な生活を望むのは当然だと思います。でも私は、ある程度便利になった今の生活で十分だと思っています。そして、これからの私達に必要なのは、これ以上の便利さを求めるよりも、ちょっと昔の生活を振り返って、自分達に本当に必要なものは何かを考える事だと思います。

世界の皆が、ほんの少しだけ「不便だなあ・・・。」と思う生活をすれば、それだけで使われる世界中のエネルギーは減るはずですよ。

私は、真のエコとは、「エコ」だと思わずに「エコ」をしている生活だと思います。だから父の仕事は、とっても「エコ」な仕事なのです。

でも私がそう言うと父は、また「そんなんじゃないよお。」と、照れくさそうに笑います。

これから、また暑い日がやって来ます。太陽が照りつける中、父は顔を真っ黒にしながらか糸を染め、着物を作ります。

そして、額の汗を拭い、こう呟くでしょう。

「今日も暑っちなあ・・・。」と。

環境大臣賞：小学生部門

タイトル：【クリーン活動で思うこと】

千葉県 浦安市立東小学校5年生 もりやま なおゆき 森山 直之

僕達の学校では、隔週の金曜日に「クリーン活動」を行なっています。登校する時にポイ捨てされた空き缶やペットボトルを拾って、リサイクルする活動です。リサイクル委員会が中心になって行なっています。

隔週とはいえ、八百人近くいる生徒が集めてくることになるので、通学路はぴっかぴかになるはずなのです。

それなのに、次の回になるとまた、空き缶もペットボトルもたくさん落ちています。

拾うものが出来てよかったと、低学年の時は思っていました。しかし、四年生になってリサイクルや、資源、環境問題の勉強をするうちに、これはおかしい、と思うようになりました。

本当は、クリーン活動というのは、空き缶を拾ったりするのではなく、もっと違う形であるべきだと思うのです。

でも、その活動がずっと続いているということは、いつもたくさんの空き缶やペットボトルが、なくなることなく落ちているからなのです。

僕は、この活動が

「もう、空き缶やペットボトルは落ちていないので、これからは、朝、ビニル袋いっぱいになるまで雑草をぬくこととします。」

というような、別の形になる日がくるようにしたいと思います。

できれば、

「雑草もなくなったので、学校のトイレや、昇降口を掃除して、気持ちのいい一日を迎えられるようにしていきましょう。」

というような、ランクアップした内容にしたいと思います。

そのためにはまず、この落ちている空き缶やペットボトルがなくなることからはじめないといけません。

よく、授業でも、一人一人の意識が大切、という内容を聞きましたが、本当にこれは難しいと思います。

東小学校の児童だけががんばっても、街を歩く人、街に住む人、一人一人が同じような気持ちになってくれないと、解決しないからです。

そこで、僕は考えました。

空き缶をポイ捨てした人に、怒ったりしようか、とか、街にポスターをはったら意識が高まるかな、とか。

でも、もっといい方法を見つけました。街の人たちに挨拶をして、「何しているの」と聞かれたらしめたものです。クリーン活動の宣伝をして、もっときれいな街になったらいいな、ということを伝えていきます。

ぼくは、今、このあいさつで仲間を増やす作戦を実行しています。

ぼくが卒業するころには、クリーン活動の内容が変わっていますように。がんばって、エコの仲間を増やしていきたいです。

環境大臣賞：中学生部門

タイトル：【地球に優しくなるために】

山梨県 山梨大学附属中学校1年生 ^{オダイラ}小平 ^{シユリ}守莉

「僕が地球を汚していたんだ。」テレビに映し出された最終処分場の画面を見ながら僕は自分が今まで当たり前にしてきた行動がとても恥ずかしく、そして怖く思えた。

「え～、こんなにあったの？」目をまん丸にしてお母さんが僕の自由研究の結果に驚いている。それもそうだろう。だって僕の家では、月に平均して二十六キロもの食物が生ゴミとして捨てられていたのだから。

僕の住む地区では週に三回、可燃ゴミの収集日がある。今まで無造作にゴミ袋に入れていたゴミを仕分けるようになったのは、兄の段ボールコンポストがきっかけだ。段ボールコンポストにウジがわき、それを処分する兄の姿に僕は違和感を覚えたんだ。何故ならウジはゴミを分解してくれる益虫だったからだ。そこで僕は、虫や微生物、自然の力を借りてごみを処理するコンポストを作ろうと考えたんだ。そしてその研究の一環として自分の家から出るゴミの分別とその重さをはかるようになった。

僕の家では、祖父の家やご近所から沢山の野菜や果物をもらう。だから一年中食卓は野菜や果物でいっぱいだ。食卓を彩る野菜や果物の皮や種、それに豊富にありすぎて食べ残してしまったもの、それらすべてが生ゴミとして捨てられていた。その重さ月に二十六キロ。家庭から出た生ゴミは焼却され、処分場へと運ばれ埋め立てられる。処分場は、ゴミの墓場となりそこだけ緑は死に絶え、まるで地球がえぐれているように見えた。なんだか不思議な気持ちになった。同じ地球上には、命をつなぐ食物が手に入らず消えていく命もあるのに僕ときたら食べたい物を食べ、嫌になれば平然と捨てていたんだ。命の糧である大切な食べ物を。

「ゴミの量、かなり減ったね。」軽くなったゴミ袋を持ちながらお父さんが嬉しそうに笑う。僕の作った虫コンポストが家庭から出る野菜ゴミを処理するようになってから、約六割のゴミの削減に成功した。それだけではない。買い物を控え無駄な物を買わなくなったし、もちろん食べ残しをしないよう作る量や食べられる量を考えるようになった。そして何よりも変わったことがある。

「ジャラジャラジャラ」ペットボトルをゆらすと、心地よい音が聞こえる。今まで自分の欲のまま買っていた食物を少し我慢するようになった分、一日数十円の小銭をペットボトルに入れていく。それらはWFPへの募金として使われる。食物をおすそわけして命を守るために。

兄の段ボールコンポストから始まった僕のエコ活動はゴミ削減だけにとどまらず、食物の大切さや命の尊さ、行動する大切さを教えてくれたんだ。そして何より地球に優しくなる機会を僕にくれたと確信している。

地球こどもクラブ賞

タイトル：【生活排水の工夫】

宮城県 仙台二華中学校3年生 鈴木 美紀

私は海が好きだ。釣りが好きだ。しかし、年々気がかりに思うことがある。魚が釣れなくなっただけか、不透明な海面にヘドロや油が浮いていることが目に付くからだ。

単刀直入に言う。個人の無責任さが、環境破壊を加速させているのではないだろうか。だって、こんなに身近な場所にも危機的状況が迫っているのだ。何のアクションも起こさず、分かり切ったように「理想のエコ」を語る人は多いが、そんな場合ではないだろう。

そこで、私は小学生の時に調べた「環境」の復習を試みた。その時の学習で、「家庭から出る生活排水が一番多い」事実に向き合ったことを思い出したからだ。

私たち人間が家庭で出す生活排水の主なものは、飲み残しの汁を流しに捨てる、という行為である。基本は下水処理だが、その三分の一は処理できず、海に流されるそうだ。各人が一回に捨てる量は微々たるものかもしれないが、「塵も積る」のだ。汚染水を元のキレイな海水に戻すには、一人分の残り汁に対して風呂五杯分の水が必要らしい。

確かにひと昔前は、工場から出る排水がメインだったが、今は完全に逆転。生活排水による汚染は、生き物が呼吸困難になるほどの大量のプランクトンを発生。この赤潮のせいかイルカだって激減したらしく、一千万倍の毒が見つかったイルカもいるというのだ。

それらを踏まえ、私は家族で生活排水の工夫に真剣に取り組むことにした。両親はすでに風呂の残り湯を洗濯に利用していたが、粉せっけんを試してみたりしていた。加えて、あらゆる排水口にはネットや伝線したストッキングをつけ、ゴミを流さないようにした。米のとぎ汁は、花の水やりに再利用した。

焼肉やカレーが好きな姉と兄は、タレやルーなどが付いた皿を新聞紙やお古のTシャツで拭いてから片付けた。新聞紙や古着は資源回収で出せるので、できるだけゴミにならないよう適度な大きさに切ってから使用。新聞紙にあっては、手に馴染むよう予めくしゃくしゃにして拭くのがいい、とは姉の見解だ。

私と妹は、食べられる分だけを取り分けてもらい、特に汁物についてはそれらを残さず飲み干すことを心がけた。母が我が家の特性に気づき、汁を極力減らした具だくさんの味噌汁・スープに変えたので、以前のように汁だけ残ることもなくなった。そういえば、大好きなインスタントラーメンの汁も調整し、かなり少なくなっているように感じる。

そう、よりよい環境は各々が自己中心的な意識や行動を改め、責任を持つから保てるのだ。私は今、生活排水の工夫に力を入れているが、力を入れるべきエコ活動が他にもたくさんあることを理解している。これからの時代、一人一人が自ら考え実行していくことが大切で、これこそエコの神髄だと思う。